

第3章 山村留學生の保護者にみる食・環境・農業支援意識

の比較分析

九州大学 矢部 光保

1 はじめに

従来、山村留学に関する調査・研究では、留學生に対する教育的効果、保護者における教育上の目的や動機、実施主体における運営状況や取り組み内容に高い関心を持っていた。山村留学を地域振興の一環と捉え、その経済効果を検討しようとした調査や論文もある。しかしながら、山村留学といえば一番に思い浮かべる「自然が豊かなところで子供を育てる」という目的は、必ずしも農山村における人の営みを必要とするものではないため、農業や農山村における仕事や生活、あるいは伝統文化や農村景観などの農林業のもつ多面的機能との係わりが明確ではない。そこで、山村留学を農村地域の活性化や農林業のもつ多面的機能と関連付けて、山村留学が保護者の意識や経済行動にどのような影響をもたらしたかについて、以下のような問題意識で分析を試みる。

第1に、保護者は山村留学地に自然を求めるが、農業や農村の営みは求めているかも知れない。そこで、山村留学の目的や動機として、1) 自然との触れ合い（仕事や生活等など人の営みにはあまり重きを置かない）、2) 田舎暮らしや農業・農村の体験（自然のみならず、田舎での人の営みを重視する）、3) 就学上の問題対処や子供の自立（必ずしも留学先は農山村である必要がない）、という3つを挙げ、実際にはどのような目的により重きが置かれていたのかを明らかにする。これにより、山村留学の目的や動機として、農業体験や農山村のもつ多面的機能の重要性が明らかになる。

第2に、山村留学の目的や動機によって、農山村の保全や振興に対する意志がどの程度異なるかを経済的に評価する。すなわち、田舎暮らしや農業・農村の体験を山村留学の目的とした場合、仕事や生活等の人の営みが山村留学地に不可欠であるが、自然体験や就学上の問題に対処することが主たる目的であれば、山村留学地での人々の営みは、それほど重視されないであろう。それゆえ、山村留学の目的や動機は、保護者は山村留学地に活力ある農山村が存続するために、支払ってもよいと保護者が考える金額に影響すると予想されるので、この点を明らかにする。

第3に、山村留学地への支援協力は、動機だけでなく、山村留学の成果にも依存するであろう。つまり、山村留学が親の期待通りの成果を挙げたならば、山村留学地の維持に積極的になると予想され、成果が上がらなければ、その逆になると予想される。そこで、山村留学の成果と関連付けて、保護者は、山村留学地に人々の営みが存続するために、どの程度までなら、金銭的に協力する意志があるのかについても経済的に評価する。

このような分析を通して、山村留学の保護者が、農山村振興のサポーターとなりうるか

について、検討していく。

本稿の構成は以下の通りである。2ではアンケート調査の設計とデータ選択について述べる。3では回答者の属性と多面的機能についての考え方、4では回答者にとっての山村留学の形態や目的、その効果について見ていく。5では山村留学地で生産された農産物に対する追加支払い意志額についての集計結果について検討し、6で本稿をまとめるとともに、残された課題を示す。

2 アンケートの設計とデータの選択

(1) アンケートの設計

保護者の抽出にあたっては、全国の山村留学を受け入れている小・中学校や山村留学センターの中から、まず、3名以上の留学生がおり、留学生の滞在形態（里親、寮、その併用および家族）がほぼ同数になるようにいる43の留学先の学校・団体を選んだ。その中から調査協力が得られたのは、留学先が40で、留学生数は417名、保護者は340名で

あった。この417名という留学生数は、2003年度留学生総数804人中のほぼ半数であった。

アンケートは、2004年3月に修了式などで保護者が現地に集まっている機会を捉え、現地で行った。ただし、当初、対象とした全ての保護者が現地を訪問したわけではないし、また、訪問しても時間や場所の制限により、アンケートを手渡すことができなかった場合もあるが、現地で依頼できた保護者については、ほぼアンケートは回収できた。その回収できたアンケート数は219であった。この有効回収数を配布予定のアンケート数で除すならば、回収率は64.4%になる（第1表参照）。

第1表 保護者アンケートの実施概要

調査対象：山村留学生の保護者
実施時期：2004年3月
選択した留学先数：43
配布予定のアンケート総数：340
有効回収数：219
回収率：64.4%

(2) データの選択

この回答されたアンケートの中で、何人かの子供を山村留学に送り出している保護者の場合には、最初に回答した子供について、山村留学の目的やその効果を分析に使用した。つまり、子供を何人か山村留学に送り出した場合、子供によっては山村留学の目的や効果が異なる場合もあるが、最初の子供の結果が悪い場合には、次の子供を送り出すことは無いと思われる。そこで、親にとって、最初の子供を通して見た山村留学の効果が重要と考え、最初に挙げられた子供の評価とその子供を山村留学に送り出した目的を採用した。

3 回答者の属性と多面的機能に関する評価

本節では、保護者の一般的属性をまず見ていく。次いで、子供への教育の背景として、

農山村についてどのような考え方をもつ保護者が子供達を山村留学に送り出したのかという点について検討する。その際、食育とも関連の深い食品の購入行動と、山村留学が行えるためには、留学先の自然環境や人間の活動が重要なので、その維持についてどのような考え方を持っているのかについて検討した。

(1) 回答者の一般的属性

1) 性別

女性が 78.1%，男性 21.0%，無記入 0.9%であった。

2) 年齢

35 歳から 44 歳までが全体の 63.1%を占めた（第 2 表参照）。

第2表 年齢

30歳未満	0.5%
30歳から34歳	8.7%
35歳から39歳	27.9%
40歳から44歳	35.2%
45歳から49歳	15.5%
50歳以上	11.9%
無記入	0.5%
合計	100.0%

第3表 職業

	本人	配偶者	本人と配偶者
会社員	18.3%	32.4%	25.3%
団体職員	1.4%	4.1%	2.7%
公務員	6.8%	8.2%	7.5%
自営業	15.5%	15.1%	15.3%
パート・嘱託	25.1%	5.5%	15.3%
主婦	21.5%	5.5%	13.5%
学生	0.0%	0.0%	0.0%
無職	3.7%	2.3%	3.0%
その他	5.9%	1.8%	3.9%
無記入	1.8%	25.1%	13.5%
合計	100.0%	100.0%	100.0%

3) 職業

本人と配偶者を合わせて全体としたとき、職業は、会社員(25.3%) 自営業(15.3%)、パート・嘱託(15.3%)、主婦(13.5%)が多い（第 3 表参照）。

4) 居住地

人口 30 万人以上の市が 52.5%を占め、都会からの参加者も多い反面、町村からの参加者も 12.3%いた。したがって、参加者は都会からだけでなく、地方からの参加者もいることがわかる（第 4 表参照）。

5) 家族構成

両親と子供の家庭が 60.3%，両親と子供と親族の家庭が 19.2%であったが、それ以外の家庭も 2 割程度あった（第 5 表参照）。

第4表 居住地	
人口30万以上の市	52.5%
10万以上30万未満の市	22.4%
10万未満の市	7.8%
町村	12.3%
無記入	5.0%
合計	100.0%

第5表 家族構成	
両親と子供	60.3%
両親と子供と親族	19.2%
父親と子供	0.9%
母親と子供	12.3%
父親と子供と親族	0.5%
母親と子供と親族	4.6%
その他	0.9%
無記入	1.4%
合計	100.0%

6) 山村留学をした子供の性別と現在の学年

男子の方が女子よりも多い。1人目の子供の場合には、男子が55.3%であり、女子は36.5%であった。1人目の子供の場合は小学生が中心であるが、中学生以上も3割程度いる。2人目の子供の場合は、ほとんどが小学生である。3人目ないし4人目の子供を山村留学に出している家庭も若干ある（第6表参照）。

第6表 山村留学をした子供				
	1人目	2人目	3人目	4人目
性別: 男	55.3%	19.6%	3.7%	0.5%
女	36.5%	13.2%	3.7%	0.9%
無記入	8.2%	67.1%	92.7%	98.6%
学年:				
小1	2.7%	2.7%	0.5%	0.5%
小2	5.9%	3.2%	0.0%	0.5%
小3	7.3%	4.1%	0.5%	0.0%
小4	12.3%	5.9%	3.2%	0.5%
小5	18.7%	5.0%	1.8%	0.0%
小6	14.2%	4.6%	0.0%	0.0%
中1	13.2%	5.0%	0.5%	0.0%
中2	7.3%	0.0%	0.0%	0.0%
中3	7.8%	1.4%	0.5%	0.0%
高校以上	2.3%	0.9%	0.0%	0.0%
無記入	8.2%	67.1%	93.2%	98.6%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

(2) 日常の購買行動について

山村留学は、食に関する教育や安全な食生活、農産物購入を通じた山村支援とも関わってくると思われるので、有機農産物やより安全な食品の購買行動、日常品に関する金銭感覚についても調べた。

第7表 日常の購買行動

	殆どしない	あまりしない	どちらでもない	少しする	いつもする	無記入	合計
有機の農産物や食材を買う	3.2%	5.5%	13.2%	57.1%	20.5%	0.5%	100.0%
栄養分や原材料を知るために食品ラベルを見る	2.3%	2.3%	5.5%	47.9%	41.6%	0.5%	100.0%
ミネラルウォーターを買ったり、浄水器を使う	16.9%	8.7%	7.8%	29.2%	37.0%	0.5%	100.0%
遺伝子組換え食品は避ける	2.3%	4.1%	10.5%	26.0%	55.7%	1.4%	100.0%
インスタント食品やレトルト食品は避ける	4.1%	9.6%	16.4%	50.2%	19.2%	0.5%	100.0%
日用品は特売のときに買いだめする	11.0%	11.9%	20.1%	34.7%	21.9%	0.5%	100.0%
日用品を買うとき100円ショップをよく利用する	7.3%	16.9%	25.1%	36.5%	13.7%	0.5%	100.0%
お買い得な日用品を探して何店かまわる	21.9%	22.8%	16.0%	29.2%	8.7%	1.4%	100.0%
日常の買い物では特売品や割引品をよく利用する	6.4%	16.0%	16.4%	39.3%	21.5%	0.5%	100.0%
どちらかといえば品質よりも価格を優先する	10.5%	26.0%	42.0%	16.4%	4.6%	0.5%	100.0%

第7表によると、日常的な購買行動として、「有機食品を買う」（「少しする」と「いつもする」を合わせた割合は77.6%）、「食品ラベルを見る」（同89.5%）、「ミネラルウォーターを買う」（66.2%）、「遺伝子組換え食品は避ける」（81.7%）、「インスタント食品を避ける」（69.4%）であるから、比較的、食の安全や自然食については、関心の高い層であると考えられる。このことは、2003年5月に行った全国インターネット調査と比較すると、日常的に、「有機食品を買う」（45.5%）、「食品ラベルを見る」（75.1%）、「ミネラルウォーターを買う」（50.4%）であったことから窺える。

また、経済的な行動については、「買いだめをする」（56.6%）、「100円ショップをよく利用する」（50.2%）、「何店か回って買い物をする」（37.9%）、「特売品をよく利用する」（60.8%）、「品質より価格を優先する」（21.0%）であった。2003年5月に行った全国インターネット調査では、「買いだめをする」（31.0%）、「何店か回って買い物をする」（25.6%）、「特売品をよく利用する」（48.3%）であったので、アンケートに回答した山村留学の保護者は、日常的に買い物をする女性が78%を占めていたこともあってか、価格を重視した購買行動をする傾向も見られる〔矢部・鈴木（2005）〕。

(3) 農業のもつ多面的機能の評価

山村留学が行えるためには農山村の維持が不可欠となる。そこで、農林業や農山村が提供している多面的機能について、保護者はどう考えているか見ていく。

第8表より、保護者は、多面的機能のなかでも、生物多様性の維持や農村景観を高く評価し、それらの機能が重要であることについて「少しそう思う」と「全くそう思う」を合わせた割合は、90%以上となっている。他方、洪水防止機能などの国土保全機能については、同割合が76.2%と、景観ほどは評価していない。おそらく生物多様性や農村景観については、山村留学の目的とも深く関わっているためであろう。

第8表 農業のもつ多面的機能の意義

	全くそう思 わない	少しそう思 わない	どちらでも ない	少しそう 思う	全くそう 思う	無記入	合計
日本の水田は、洪水を緩和するなど、食料生産以外にも重要な役割を担っている	1.8%	0.5%	18.3%	37.4%	38.8%	3.2%	100.0%
水田は魚や昆虫に貴重な生息環境を提供している	0.5%	0.5%	4.1%	31.1%	62.1%	1.8%	100.0%
伝統的な日本の農村景観を残すことは価値がある	0.5%	0.0%	3.7%	27.9%	67.1%	0.9%	100.0%
棚田は日本人の心の故郷である	0.9%	1.8%	16.9%	38.4%	39.3%	2.7%	100.0%
日本農業は守るだけの価値があるので、現状程度の輸入制限ならば認めても良い	4.6%	9.1%	24.7%	30.1%	29.2%	2.3%	100.0%

ここで、吉田（1999）が行ったアンケート調査によれば、中山間地のもつ多面的機能のうちどの機能が重要と考えるかという質問について、重複回答を含め、「国土保全」を挙げた割合は74.8%、「水資源涵養」は67.6%、「生物・生態系保全」は69.7%であったのに対し、「伝統文化の保存」は41.5%、「アメニティー提供」は38%であった。この点からも、山村留学の保護者は、農山村の環境教育に関わる機能を高く評価していることがわかる。

また、日本農業の価値を評価し、現状程度の輸入制限を認めた者は59.3%であった。

4 山村留学の形態、目的および効果

以下では、山村留学の形態や目的、その効果について調査結果を見ていく。

(1) 山村留学の形態

1) 山村留学の情報の入手先

第9表で示すように、山村留学の情報を得たところについては、テレビや新聞・雑誌が41.1%でもっとも多かった。

第9表 山村留学の情報を得たところ(重複回答あり)

知人や学校の先生に薦められて	23.7%
自然体験活動に参加させて	21.9%
テレビや新聞・雑誌などを見て	41.1%
インターネットを見て	24.7%
その他	16.0%

2) 山村留学の形態

第10表で、山村留学の形態を見ると、「里親宅と寮やセンターの併用」が最も多くて30.6%、次いで「寮やセンター」が23.7%であった。2003年度における全国の参加者（留学生）と比較すれば、保護者の割合と留学生自身の割合の違いはあるものの、本調査では、「里親宅と寮やセンターの併用」の割合が多いのが特徴的である。

第10表 山村留学の形態

山村留学の形態	調査対象留学生	全国の参加者
里親	21.9%	25.6%
寮やセンター	23.7%	29.5%
里親宅と寮やセンターの併用	30.6%	9.7%
家族で転居	17.8%	21.1%
その他	5.9%	14.1%
合計 (実数)	100.0% (219)	100.0% (804)

(2) 山村留学の目的

山村留学の目的や動機として、1) 自然との触れ合い（人間の営みにはあまり重きを置かない）、2) 田舎暮らしや農業・農村の体験（自然のみならず、田舎での人の営みを重視する）、3) 就学上の問題対処や子供の自立、という3つを考えたが、実際にはどのような目的をより重視していたかを明らかにする。

1) 自然体験と田舎暮らし（農業・農村）の体験

第11表では自然体験と、田舎暮らしや農業・農村の体験に関わる目的を示している。特に、「よく当てはまる」の割合を見ていくと、自然体験を重視したものとしては、「自然の中でのびのび育つ」(84.9%)、「自然の中で遊ぶ」(68.0%)、「野外活動」(58.4%)、「自然への感性」(74.9%)と高い評価を示している。他方、農業との関連では、「四季折々の田舎暮らしの体験」(57.1%)と比較的高いものの、「田植えなど農作業体験」(44.7%)、「炭焼きなど昔の生活体験」(32.0%)、「小動物との触れ合い」(34.2%)、「伝統文化」(24.2%)など、自然体験に比較すると、重要度は低くなっている。これより、自然体験の方が田舎暮らし（農業・農村）体験より、目的として挙げられることが多いことがわかった。

第11表 山村留学の動機や目的（自然体験や農作業体験）

	全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	無記入	合計
自然の中でのびのびと育ってほしかったから	0.5%	0.9%	1.4%	10.5%	84.9%	1.8%	100.0%
虫探し、木登り、魚釣りなど自然の中で思い切り遊ばせたかったから	1.4%	1.8%	4.1%	22.8%	68.0%	1.8%	100.0%
キャンプ、ハイク、スキーなど野外活動に参加させたかったから	1.4%	2.3%	11.4%	24.7%	58.4%	1.8%	100.0%
自然への感性や知識を身につけさせたかったから	0.5%	0.9%	3.2%	19.2%	74.9%	1.4%	100.0%
田植えや稲刈り、野菜作りなど体験させたかったから	1.8%	3.7%	17.8%	29.7%	44.7%	2.3%	100.0%
炭焼き、豆腐や漬物作り、ソバ打ちなど昔ながらの生活を体験させたかったから	5.0%	5.9%	24.7%	30.6%	32.0%	1.8%	100.0%
四季折々の田舎暮らしを体験させたかったから	0.9%	2.3%	11.9%	24.2%	57.1%	3.7%	100.0%
小動物や牛など動物とふれあう体験をさせたかったから	2.7%	3.7%	24.7%	31.1%	34.2%	3.7%	100.0%
太鼓や舞踊など伝統文化に親しませたかったから	9.1%	2.7%	29.2%	30.6%	24.2%	4.1%	100.0%

2) 教育や生活環境の改善

第12表から、山村留学の目的として、教育や生活環境の改善を挙げた場合を見ていこう。まず、「少し当てはまる」、「よく当てはまる」をあわせた割合について、「身体を強くする」(21.0%)の他に、「家庭の都合」(11.4%)、「先生と合わなかった」(12.7%)、「学校に行くのを嫌がっていた」(12.8%)、「友人関係が好ましくなかった」(14.2%)、「学区内の学校に行かせたくなかった」(12.8%)と、1割強の保護者が、地元の学校における教育上の問題を回避・改善するために、山村留学を選択したことが分かる。ただし、この点については、地元の学校教職員が推測した留学目的として、中学生の場合には30%程度が「学校になじめない」等の就学上の理由を挙げているのと異なった結果となっている。

他方、積極的な教育環境改善の目的については、「親と離れた暮らし」(47.9%)、「子供の力を試させる」(65.3%)、「たくましさを身につける」(85.9%)と、比較的高い重要性を認めていることがわかる。

第12表 山村留学の動機や目的(教育や生活の環境改善)

	全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	無記入	合計
体が弱かったので強くさせたかったから	50.2%	7.8%	19.2%	16.0%	5.0%	1.8%	100.0%
家庭の都合で	75.8%	1.8%	9.6%	8.2%	3.2%	1.4%	100.0%
先生と合わなかったから	70.8%	4.6%	9.6%	10.0%	2.7%	2.3%	100.0%
学校に行くのを嫌がっていたから	73.1%	2.7%	9.1%	7.3%	5.5%	2.3%	100.0%
友人関係が好ましくなく、離れさせたかったから	69.4%	5.0%	9.1%	9.6%	4.6%	2.3%	100.0%
学区内の学校に行かせたくなかったから	74.4%	2.7%	7.8%	6.4%	6.4%	2.3%	100.0%
親と離れた暮らしを体験させたかったから	29.2%	4.1%	15.1%	26.0%	21.9%	3.7%	100.0%
子ども自身の力を試させたかったから	12.3%	3.7%	16.4%	28.8%	36.5%	2.3%	100.0%
たくましさを身につけてほしかったから	5.0%	1.8%	5.5%	30.6%	55.3%	1.8%	100.0%
先に兄弟が参加していたから	75.3%	0.5%	5.5%	3.7%	11.0%	4.1%	100.0%

(3) 山村留学の効果

第13表によって、山村留学の効果を見ていこう。「よく当てはまる」と回答した割合は、「自然の中でのびのび過ごせた」(79.0%)、「田舎暮らしを楽しんだ」(70.3%)、「心身ともにたくましくなった」(77.6%)と、自然体験や田舎暮らしについての効果は高い評価を得ている。

第13表 山村留学の効果

	全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	無記入	合計
自然の中でのびのびと過ごせた	0.9%	0.9%	0.9%	16.4%	79.0%	1.8%	100.0%
学校に楽しく行けるようになった	3.2%	0.9%	22.4%	14.2%	55.7%	3.7%	100.0%
田舎暮らしを十分楽しんだ	0.9%	0.9%	4.1%	21.9%	70.3%	1.8%	100.0%
心身ともにたくましくなった	0.0%	0.0%	3.2%	17.4%	77.6%	1.8%	100.0%
友人や先生との関係が良くなった	0.9%	0.9%	17.8%	21.5%	54.3%	4.6%	100.0%

他方、就学問題に関係した効果については、同割合が、「学校に楽しくいけるようになった」(55.7%)、「友達や先生との関係がよくなった」(54.3%)と、評価は幾分、低めになっている。特に、「学校に楽しくいけるようになった」について、「全く当てはまらない」が3.2%おり、若干ではあるが期待通りの成果が得られなかった場合もあることがわかる。

(4) 山村留学を通じた地元との交流

第14表で、山村留学を通じた地元との交流について見よう。「少し当てはまる」「よく当てはまる」をあわせた割合は、「留学地に家族でしばしば遊びに来ている」(81.8%)、「第2の故郷のように思っている」(89.5%)、「里親などと家族ぐるみの付き合いをしている」(61.2%)と交流が深まっていることが分かる⁽¹⁾。他方、経済的な関係について見ると、「留学地の農産物を買うのが楽しみになった」(64.4%)、「留学地の農産物を産直などで買っている」(45.6%)と半数前後の保護者は、何らかの形態で留学地の農産物を購入していることがわかる。

第14表 山村留学を通じた地元との交流

	全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	無記入	合計
留学地に家族でしばしば遊びに来ている	3.7%	0.9%	10.0%	36.1%	45.7%	3.7%	100.0%
留学地を第2の故郷のように思っている	2.3%	0.5%	6.4%	24.7%	64.8%	1.4%	100.0%
里親などと家族ぐるみの付き合いをしている	7.3%	2.3%	23.3%	27.4%	33.8%	5.9%	100.0%
留学地の農産物を買うのが楽しみになった	5.0%	2.7%	25.6%	28.8%	35.6%	2.3%	100.0%
留学地の農産物を産直などで買っている	13.7%	7.3%	29.7%	23.7%	21.9%	3.7%	100.0%

5 山村留学地等の山間地で生産された農産物に対する追加支払い意志額の評価

本調査の新規性は、山村留学の保護者が抱いている山村留学地を支援する気持ちについて、これを経済的に評価する点にある。そこで、以下の質問によって、山村留学地で生産された農産物に対する追加支払い意志額の質問を通し、農山村を支援する気持ちを経済的に評価する。

(1) 山間地農産物に対する追加支払い意志額の分布

質問文は以下のとおりである。

【山村留学のためには、農山村に人が住み続けることが必要です。もし、山里に人が住まなくなれば、田畑や山林は荒れ、里親もいなくなります。四季折々の田舎暮らしを通して子供たちが自然と触れ合うこともできなくなります。そこで、農山村の暮らしとあなたの生活との関係についてお尋ねします。次のような状況を想像して、お答え下さい】

あなたが、食料品を買いにお店に行ったとき、特産品コーナーが常設され、野菜や米、サツマイモやジャガイモ、果物、牛乳などが売られていたとします。生産地は、必ずしもあなたのお子さんの山村留学先ではありませんが、十分に山村留学ができるような山間の村で生産された農産物とします。

問 6 その農産物は、低農薬・低化学肥料で味も品質も優れており、山間の村で生産され、どこ
の農家がどのようにして作ったかも知ることができます。この農産物を日常的に買う
とした場合、味や品質、栽培方法とも普通の農産物に比較して、あなたは、およそいくらま
でなら、余分に支払ってもよいと思いますか。(1 つに○)

- | | | | |
|--------------|---------------------|-------------------|---------|
| 1. 特に買うことはない | 2. 余分には支払わないが買ってもよい | 3. 1% | 4. 2% |
| 5. 3% | 6. 5% | 7. 10% | 8. 15% |
| 9. 20% | 10. 25% | 11. 30% | 12. 35% |
| | | 13. それ以外(%) | |

問 7 その農産物は、低農薬・低化学肥料で味も品質も優れており、山間の村で生産され、農家
や詳しい生産方法についての情報はありませ。この農産物を日常的に買うとした場合、味
や品質、栽培方法とも普通の農産物に比較して、あなたは、およそいくらまでなら、余分に
支払ってもよいと思いますか。(1 つに○)

- | | | | |
|--------------|---------------------|-------------------|---------|
| 1. 特に買うことはない | 2. 余分には支払わないが買ってもよい | 3. 1% | 4. 2% |
| 5. 3% | 6. 5% | 7. 10% | 8. 15% |
| 9. 20% | 10. 25% | 11. 30% | 12. 35% |
| | | 13. それ以外(%) | |

追加支払い意志額の分布を見ると、第 15 表に示されるように、生産情報があった場合には、「余分に支払わないが買ってもよい」(20.1%)、「5%まで余分に支払ってもよい」(11.4%)、「10%～35%まで余分に支払ってもよい」(57.5%)と、山村の農産物を購入することに積極的な傾向が示された。1%から 35%までの支払い意志を示さなかった人の追加額はゼロと仮定した場合の平均的な支払い意志は 10.8%であった。

次に、生産情報がなかった場合には、「余分に支払わないが買ってもよい」(35.2%)、「5%まで余分に支払ってもよい」(11.4%)、「10%～35%まで余分に支払ってもよい」(37.0%)であり、平均的支払い意志は 6.7%であるから、生産情報のある場合ほどではないが、山村の農産物を購入することに比較的好意的傾向が見られた。したがって、山村留学などを通して、都市住民との交流を深めることは、地域農業の振興側面からも効果があると思われる。

第15表 山村留学地で生産された農産物

	生産者の情報あり	生産者の情報なし
特に買うことはない	1.8%	5.9%
余分に支払わないが買ってもよい	20.1%	35.2%
1%	0.5%	0.5%
2%	0.5%	0.9%
3%	3.2%	4.6%
5%	11.4%	11.4%
10%	24.2%	20.1%
15%	5.9%	4.1%
20%	14.2%	5.5%
25%	1.8%	1.8%
30%	7.8%	3.2%
35%	3.7%	2.3%
それ以外	3.2%	2.7%
無記入	1.8%	1.8%
合計	100.0%	100.0%

(2) 山間地農産物に対する追加支払い意志額とのクロス集計

以下では、どのような保護者が、山村留学地等の山間地農産物に対して積極的評価を与えているのかを検討する。まず、山村留学の動機とのクロス表を検討していこう。追加支払い意志額とクロスさせる項目については、回答の分布ができるだけ偏っていないものを選択したものである。第16表と第17表で、「よく当てはまる」の回答を比較すれば、山村留学の目的が、自然体験よりも農業体験であったとき、より高い支払意志が読み取れる。

第16表 山留目的(自然体験活動)と追加支払い額のクロス(単位: %)

		キャンプ、ハイク、スキーなど野外活動に参加させたかったから					合計
		全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	
山村で生産された農産物に対する追加支払い	買わない	0.0	0.0	4.2	3.7	0.8	1.9
	買ってもよい	33.3	0.0	20.8	18.5	21.4	20.4
	1%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.5
	2%	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	0.5
	3%	0.0	0.0	0.0	7.4	2.4	3.3
	5%	0.0	0.0	8.3	5.6	14.3	10.9
	10%	66.7	50.0	16.7	20.4	27.0	25.1
	15%	0.0	0.0	8.3	9.3	4.8	6.2
	20%	0.0	25.0	16.7	16.7	12.7	14.2
	25%	0.0	0.0	4.2	0.0	2.4	1.9
	30%	0.0	25.0	12.5	13.0	4.8	8.1
	35%	0.0	0.0	4.2	3.7	4.0	3.8
	それ以外	0.0	0.0	4.2	0.0	4.8	3.3
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
(実数)		(3)	(4)	(24)	(54)	(126)	(211)

第17表 山留目的(農業体験)と追加支払い額のクロス(単位:%)

		田植や稲刈り、野菜作りなど体験させたかったから					合計
		全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	
山村で生産された農産物に対する追加支払い	買わない	0.0	0.0	5.3	1.6	1.0	1.9
	買ってもよい	75.0	25.0	21.1	21.9	16.5	20.4
	1%	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.5
	2%	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.5
	3%	0.0	0.0	2.6	3.1	4.1	3.3
	5%	0.0	0.0	2.6	12.5	13.4	10.4
	10%	25.0	37.5	34.2	28.1	18.6	25.1
	15%	0.0	0.0	2.6	7.8	7.2	6.2
	20%	0.0	12.5	18.4	14.1	14.4	14.7
	25%	0.0	0.0	5.3	0.0	2.1	1.9
	30%	0.0	25.0	5.3	6.3	9.3	8.1
	35%	0.0	0.0	0.0	3.1	6.2	3.8
	それ以外	0.0	0.0	2.6	0.0	6.2	3.3
合計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
(実数)		(4)	(8)	(38)	(64)	(97)	(211)

また、山村留学の目的が「親からの独立」というように山村留学地の環境とはあまり関係のない動機の場合には、第18表で見るように、「よく当てはまる」の部分の割合が、全体の平均を示す「合計」での割合と比べ、より高い支払意志額を示しているとは言えない。次に、農業保護との関連を第19表で見ると、現状程度の輸入制限を認めることについて「全くそう思う」人は、「合計」における割合と比べて、より高い支払意志額が多い。

他方、第20表で、家族ぐるみの交流をしていることに「よく当てはまる」人については、「合計」より多少高めの支払い意志額が見られる。しかしながら、第21表で、地元との交流において、当地の農産物を買うことについて「よく当てはまる」人の場合は、「合計」より高めの支払い意志額が見られる。さらに、第22表でも、山村留学の効果として、田舎暮らしを十分楽しんだについて、「よく当てはまる」場合には、「合計」よりも高めの支払い意志額が見られた。

以上から、山村留学地の農業や農産物に関心を持っている人ほど、また、山村留学の成果が見られた人ほど、山村留学地等の山間地帯で生産された農産物に対し、より高い支払い意志のあるように思われる。

第18表 山留目的(親からの独立)と追加支払い額のクロス(単位:%)

		親と離れた暮らしを体験させたかったから					合計
		全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	
山村で生産された農産物に対する追加支払い	買わない	1.6	0.0	6.5	1.8	0.0	1.9
	買ってもよい	17.2	11.1	25.8	17.5	22.9	19.6
	1%	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
	2%	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
	3%	3.1	0.0	3.2	3.5	2.1	2.9
	5%	9.4	11.1	9.7	17.5	10.4	12.0
	10%	20.3	44.4	19.4	26.3	31.3	25.4
	15%	4.7	0.0	3.2	8.8	6.3	5.7
	20%	20.3	0.0	12.9	12.3	12.5	14.4
	25%	1.6	0.0	0.0	1.8	4.2	1.9
	30%	10.9	33.3	9.7	3.5	4.2	8.1
	35%	3.1	0.0	6.5	3.5	4.2	3.8
	それ以外	4.7	0.0	3.2	3.5	2.1	3.3
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	(実数)	(64)	(9)	(31)	(57)	(48)	(209)

第19表 農業保護のための輸入制限と追加支払い額のクロス(単位:%)

		日本農業は守るだけの価値があるので、現状程度の輸入制限ならば認めても良い					合計
		全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	
山村で生産された農産物に対する追加支払い	買わない	0.0	0.0	1.9	3.1	1.6	1.9
	買ってもよい	10.0	20.0	29.6	16.9	16.1	19.9
	1%	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0	0.5
	2%	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0	0.5
	3%	0.0	5.0	1.9	6.2	1.6	3.3
	5%	10.0	5.0	18.5	12.3	8.1	11.8
	10%	30.0	25.0	20.4	30.8	22.6	25.1
	15%	0.0	5.0	5.6	4.6	9.7	6.2
	20%	30.0	15.0	9.3	13.8	16.1	14.2
	25%	10.0	5.0	0.0	1.5	1.6	1.9
	30%	10.0	5.0	5.6	4.6	14.5	8.1
	35%	0.0	10.0	3.7	1.5	4.8	3.8
	それ以外	0.0	5.0	1.9	3.1	3.2	2.8
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	(実数)	(10)	(20)	(54)	(65)	(62)	(211)

第20表 地元との交流(家族ぐるみの付き合い)と追加支払い額のクロス(単位: %)

		里親などと家族ぐるみの付き合いをしている					合計
		全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	
山村で生産された農産物に対する追加支払い	買わない	6.3	0.0	2.0	1.7	1.4	2.0
	買ってもよい	37.5	40.0	17.6	20.0	16.4	20.0
	1%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	2%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	3%	0.0	0.0	3.9	6.7	1.4	3.4
	5%	0.0	20.0	11.8	18.3	6.8	11.2
	10%	18.8	20.0	25.5	28.3	24.7	25.4
	15%	0.0	0.0	5.9	3.3	11.0	6.3
	20%	25.0	0.0	13.7	11.7	16.4	14.6
	25%	0.0	0.0	3.9	0.0	2.7	2.0
	30%	6.3	0.0	13.7	6.7	6.8	8.3
	35%	6.3	20.0	2.0	1.7	4.1	3.4
	それ以外	0.0	0.0	0.0	1.7	8.2	3.4
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	(実数)	(16)	(5)	(51)	(60)	(73)	(205)

第21表 地元との交流(当地の農産物を買う)と追加支払い額のクロス(単位: %)

		留学地の農産物を産直などで買っている					合計
		全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	
山村で生産された農産物に対する追加支払い	買わない	18.2	0.0	0.0	3.2	0.0	1.9
	買ってもよい	36.4	20.0	23.2	15.9	19.2	20.2
	1%	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	0.5
	2%	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.5
	3%	0.0	0.0	3.6	4.8	2.6	3.3
	5%	0.0	20.0	16.1	9.5	10.3	11.3
	10%	27.3	60.0	21.4	33.3	17.9	24.9
	15%	0.0	0.0	5.4	6.3	7.7	6.1
	20%	18.2	0.0	12.5	11.1	19.2	14.6
	25%	0.0	0.0	1.8	1.6	2.6	1.9
	30%	0.0	0.0	14.3	6.3	6.4	8.0
	35%	0.0	0.0	0.0	3.2	7.7	3.8
	それ以外	0.0	0.0	1.8	3.2	5.1	3.3
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	(実数)	(11)	(5)	(56)	(63)	(78)	(213)

第22表 山村留学の効果(田舎暮らしを楽しんだ)と追加支払い額のクロス(単位:%)

		山村留学の効果(田舎暮らしを楽しんだ)					合計
		全く当てはまらない	少し当てはまらない	どちらでもない	少し当てはまる	よく当てはまる	
山村で生産された農産物に対する追加支払い	買わない	18.2	0.0	0.0	3.2	0.0	1.9
	買ってもよい	36.4	20.0	23.2	15.9	19.2	20.2
	1%	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	0.5
	2%	0.0	0.0	0.0	1.6	0.0	0.5
	3%	0.0	0.0	3.6	4.8	2.6	3.3
	5%	0.0	20.0	16.1	9.5	10.3	11.3
	10%	27.3	60.0	21.4	33.3	17.9	24.9
	15%	0.0	0.0	5.4	6.3	7.7	6.1
	20%	18.2	0.0	12.5	11.1	19.2	14.6
	25%	0.0	0.0	1.8	1.6	2.6	1.9
	30%	0.0	0.0	14.3	6.3	6.4	8.0
	35%	0.0	0.0	0.0	3.2	7.7	3.8
	それ以外	0.0	0.0	1.8	3.2	5.1	3.3
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
(実数)		(11)	(5)	(56)	(63)	(78)	(213)

6 おわりに

本調査では以下の点が明らかになった。

まず、保護者のもつ山村留学の目的として、1) 自然との触れ合い(仕事や生活など人の営みにはあまり重きを置かない) 2) 田舎暮らしや農業・農村の体験(自然のみならず、田舎での人の営みを重視する)、および 3) 就学上の問題対処や子供の自立(必ずしも留学先は農山村である必要がない)は異なる目的として存在し、多くの人が目的として挙げるのは1)、2)、3)の順であった。

次に、山村留学の目的や動機によって、農山村の保全や振興に対する意志は異なることが読み取れた。特に、山村留学地の農業や農産物に関心を持っている人ほど、また、山村留学の成果が見られた人ほど、山村留学地等の山間地帯で生産された農産物に対し、より高い支払い意志のもつ傾向があると思われた。

また、山村で生産された農産物に生産情報がない場合の追加支払い額は、平均で生産物価格の6.7%であったのに対し、生産情報がある場合には10.8%であった。このことは、生産情報を適切に提供し、生産者の顔の見える農産物を販売していくことの重要性を物語るものであろう。

本調査の課題としては、データの分析にあたって、計量的手法や検定を用いていないことである。したがって、集計結果の解釈の客観性を高めるため、統計的手法を用いて分析内容の精緻化を図っていく必要がある。また、多くの質問に対して、統一的に比較するため、設問に対してあまりそぐわない回答選択肢もあったが、より適切な質問と回答を用意することも今後の課題であろう。

[注]

(1) なお、「留学地に家族でしばしば遊びに来ている」という問いに対しては、頻度で答えることがより適切であったかもしれないが、多くの質問を相互に比較するために、当てはまりの程度を回答に用いている。

[参考・引用文献]

- 矢部光保・鈴木由紀(2005)「食の安全・安心と環境に関する消費者意識のインターネット調査」
(農林水産政策研究所編『危機管理プロジェクト資料第2号 食の安全・安心と環境意識，ト
レーサビリティに関するインターネット調査と定量分析』2005年3月)
- 吉田謙太郎(1999)「CVMによる中山間地域農業・農村の公益的機能評価」『農業総合研究』53(1)，
45-87 ページ